

畳半畳に出現する、多様な生命の 燃焼。試みは始まったばかりだ。REVIEW

2/14(月)～2/16(水) ■中西レモン企画
『畳半畳vol.3』 神楽坂ディーブラッツ



寺脇×野口



小田原真貴

中西レモン氏は企画もするが、自らも行為を行う。誰の弟子でもなく、しかも美術という別の世界からやってきた。だから中西企画「畳半畳」のコンセプトは、ダンス/舞踊/舞踏/その他に対する「アンチ」ではなく、「問いかけ」にその主眼がある。畳半畳分の面積で、見られる側は四面から見る側に囲まれるという窮地に立たされながら、生命を燃焼し、そこには行為を分類する言葉以前の「何か」

があり、両者は純粹に共鳴するはずだと中西氏は考えている。ここで問題なのは「分類」である。岡倉覚三は1903年、英語圏の方々に対して次の言葉を発した。「我々は忘れていたのだ、分類の時代において、類型とは、つまるところ近似の大海のなかの差異の光点に過ぎず、心の都合のために崇拜の対象として念入りに用意された偽りの神々のようなものだから、類型というもの、究極の、つまり相互に排除し合って成り立つ有効性を持っていないことであり、それはふたつの交換のきく知が別々の実在ではないのと同じに過ぎないということを。」(『東洋の理想』)。この近代的分類に振り回されない視点に、耳を傾けてもいいのではないだろうか。

確かに従来の分類に当て嵌まらないフォルムを見られる側は提示した。14日。富沢房江の「飛ぶ方法」。自己を緑に着色し、ゆっくりと動いた。ここには男でも女でも人でもオブジェでもない、「人体」に対する興味を

教えてくれた。小田原真貴の「flowers」。録音された曲に合わせて、うつ伏せで足を動かす、立ってゆっくり廻る。手足の「指」の稼働領域、そこから生れる波紋は、全体の螺旋を生み出した。野出春子の「おれはうただ おれはここをあるく 2005」。座る。服をたたむ。歌う、そしてテープレコーダーから流れる音を残して去る。日常の行為、テープの音、生身の歌声が、イメージの世界と巧みに合致する。中西レモンの「肉色パンツ」。腰を軸にして旋回する。恍惚の表情を浮かべる。その位置は、常に立つ/座るという二項対立以外の場所だ。「美は痙攣する」ことを端的に示した。15日。椎名利恵子×富田秀康(E・Guitar)。椎名は小刻みに/大胆に、垂直に/並行に、動く/止まる。「休止」は演奏の「休符」へ問いかける。演奏からの問もあった。この相互性は「活動」の意義を炙り出した。若尾伊佐子の「植物の快樂」。寝る、起きる、動く、寝る。分り易さを全面に出しつつ、指先まで行き届いた動きは、空間の複雑な処理が絡み合う。音のない空間での静謐な行為だった。村田いづ実の「UNTITLED」。金髪の若い娘は、外で遊んだ後、家に帰ってくつろぐ。立体の構成を示す。更に日常に見えながらも白昼夢を思い起こさせる。そこに滑稽さはなく、楽しさが内在している。新美佳恵×清水浩(S・A・Guitar)『無題』。新美は畳を時計回りに/反対に歩き廻る。止まって形をつくり、また廻る。「動く」ことの緊迫感が支配する。ミュージシャンの肉体が発動する必然性が生まれた。16日。終アリスの「ひと科ね草」。網の中でもかき、抜け出す。暗転後、タキシード姿でステップを踏み、箱から白い炎を燃え立たせる。この様な二部構成だ。男女の会話のテープを流し、複合的な物語性を強く打ち出した。小杉裕美の「砂(サ)鎖(サ)詐(サ)唆(サ)」。弾く、引っ張る、舟を漕ぐ、食べる等、パントマイム的な動きを見せた。手と足という器官が、実は均一であることを知らせてくれる。見えないものを空間から生み出す技法が見事だった。富岡千幸は畳にあがる、座る、立つ、去る、これだけに25分費やした。田井淳三郎のA・Guitarのテープを、

ジャパノ・アウフ・ギヤルト

——アングラ演劇傑作ポスター展
日本のポスター文化の頂点をなす60～70年代の輝かしくも挑戦的な原色日全版演劇ポスター80枚を一挙に展示。お見逃しなく。
4月28日～5月18日 シアター1010(北千住駅前)
☎03-5244-1010
同時期に寺山修司の「血の起源」/「奴隷訓」を上演

僅かに、そして効果的に使い、照明をうまく利用して、見る側の時間感覚を打ち砕く。野口加津美と森脇ゆりによる『オールドタウン』。80年代ディスコ調の曲が流れ、二人は縦横無尽に暴れ回る。畳をストリートに変換し、派手でしかも優雅な動きを二人は融合することに成功した。

勿論総てが上手く行った訳ではない。畳を「和の空間」に異化して、安易に正座してしまう傾向があった。「狭い空間」と定義して、ステップが足りない場面もあった。中西氏は、畳をはみ出しては駄目だと言わない。



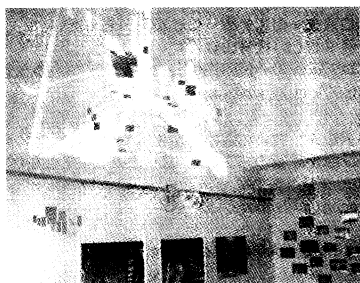
村田いづ実↑ 終アリス↓



その点を考慮に入れて、もっと自由に振舞えるはずである。畳が主体ではないのだ。また、見る側に、物語性=具象、動作=抽象という二項に分類されてしまう面も指摘できる。そして、普段のステージに座布団、椅子が置かれたにも関わらず、見られる側は普段の客席を意識しすぎて、正面性を重視した場合が多くあった。それは、見る側にも問題があったのかも知れない。ここには「見る側」と「見られる側」の混在という面白さがある。高尚な評論家の先生が、畳の上での出来事に全く面白味を感じなかったのか、しきりに帰る支度をしている姿が他の角度から丸見えだった。これこそ「生命を燃焼させる」行為として認識する必要があるだろう。「畳半畳」の試みは、中西氏にも、見る側にも、見られる側にも、始まったばかりだ。そしてこの分類を問うことさえも。(宮田徹也/日本近代美術思想史研究)
撮影/田中英世

INTOWN アルカサバ!

●3月某日 東京 用賀のアートコクーンへ。1979年生まれの杉本剛は映し出す町を、夜



中を徘徊するような感覚で撮らえている。暗闇での恐怖、それは決して「怖い」という形容詞で片付けられるのではなく、スリルを感じたり面白いと思うこともある恐怖だ。アートコクーンで見た展示では、モノクロームの紙焼き写真だけでなく、日が落ちた時間には壁へスライドショーとして投影していた。ビルや公園などの切り取られた風景を、見ている観客(私)が歩いているような気持ちになる。人が写ってないせいか、ひとつひとつの写真に物語が見える気がして、「この写真の前で踊るシーンが合いそう」など想像が駆け巡った。小さなスペースだというのに、たくさん歩いて、たくさん物を見て、たくさん想像をしてしまった一日だった。(藤田千

彩) ■杉本剛展「Walk in the Night」アートコクーン <http://www.artcococon.com/> 3月4日～27日

●3月12日 戦火の続くパレスチナ自治区のラマラから、アルカサバ・シアターが「壁 占領下の物語II」を持って2度目の来日公演。(東京国際芸術祭 3ページにも記事あり)。その舞台では、イスラエルが構築中の分離フェンスによって破壊される日常の悲劇的体験を、俳優たちが情感豊かなモノローグで語り継いだ。深く深く心に響く名作。演技も、椿昇デザインの実験フェンスの装置も、シンプルで美しかった。パレスチナのみならず欧米各地でも絶賛を博したアルカサバの表現力を支えているのは、俳優が戦火の日常で蒐集した体験を舞台で語るという集団創作的な方法だ。アルカサバの芸術監督ジョージ・イブラヒムは次のように語った。「もともとはスタニスラフスキーのリアリズム表現から出発したアルカサバは、2000年の第2次インテファダのおおきな悲劇の中で、この方法に行き着いた。街の日常を写す舞台を見た観客は、占領下の現実を直視し、連体感をもって苦難を共有し、そして笑って心を癒したのだ。戦火のもとで演劇を本当に必要とした観



客と俳優たちの、これは最良の選択だった」。重い言葉もあった。「今のように世界が黙認している限り、イスラエルは壁を作り続け、パレスチナ人の生存は極めて困難になって行くだろう。彼らは本気で我々の土地を奪うつもりなのだ。全ては世界の人々の態度にかかっている。」(インタビューの記事は「すばる」(集英社)5月号に掲載されます) 井上 ●3月某日 東京錦糸町にあるタキナミガラスファクトリーへ。多いときには140人を超える従業員が働いていたという工場跡地と元・倉庫を利用したこの場所でイベントが開かれた。彫刻や絵などの展示だけでなく、ガラス職人による作品やインスタレーションとしてのガラスなどが置かれている。休日にはライブも行われ、さまざまなジャンルが交錯している。特に私の目を奪ったのは、天井に頭がつきそうな工場2階にあった映像作品。出品している6人の作品が、天井を這うように張られた8ミリフィルムが映写機を通り、数分間でループしている。スペースの再利用を目的としたイベントは今までもあるが、ジャンルを超えた展示、ジャンルを意識しないで見られる観客、毎日なから行われているイベントはとて楽しいものだ。春の予感を感じさせるような、わくわくする機会だった。(藤田千彩)
TAKENAMI PARTING PRESENTS 3月18日～27日

怒り叫びおののき、観客の安穏な期待を打ち砕く、目前の他者

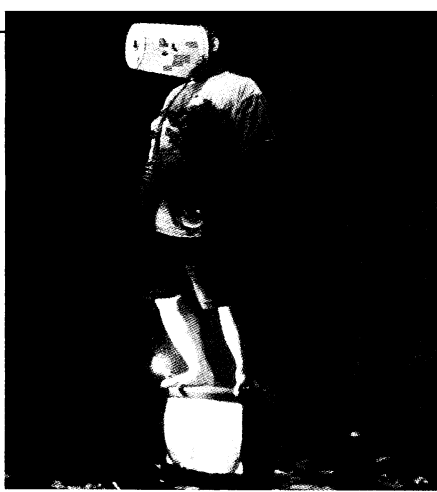
OM-2黄色舞技団 die prätze M.S.A. collection参加公演「作品 No.3」
3月16日～18日 町屋ムーブホール(ムーブ町屋)

die prätze MSAコレクションの先陣を切って上演されたOM-2の新作「作品No.3」は、彼らの近作同様、ハイナー・ミュラーのテキストを用い、佐々木敦、中井尋央を始めとする役者陣の観客を圧倒するパフォーマンスが休む暇なく観客につきつけられるという過激な作品だった。佐々木は前作のように直接ものを破壊することはなかったにもかかわらず、その巨体の動きと声の節々にあからさまな暴力性を際立たせていたし、中井がカミソリで自らの手首を傷つけ、白いドレスを赤く染めながら踊るシーンに至っては、客席に戦慄が走った。それだけではない。3、4メートルはあろうかという壁が客席の最前列ぎりぎりの位置まで倒れてくる仕掛けなど、舞台全体が客席に攻撃的な刺激をしかけてくる。また、今作では巧みな音の使い方に気づかされた。女性パフォーマンスが髪をかきむしる音、佐々木がバケツに顔ををつっこんだまましゃべる音などがビックアップマイクで拾われ、会場に響くのだが、これが実に生々しい音なのである。機械

を通して無遠慮に拡大された音は、生音よりもリアリティを持っているように聴こえた。いったいなぜ、かくも攻撃的な作品を私は観に行くのか。「私たちは演劇で何ができるのか(中略)考えずにはいられない」と公演のチラシにあった。

この表現を借りるなら「私たちは何を期待して観客席に座っているのか」と考えずにはいられない。私は、この作品全体にあふれる暴力性を自分の事のように共感する者ではないが、彼らの作り出す世界を「他人事」としてやり過ごす事は出来ない。彼らの作品は「他者」として観る者の前に存在し、安易な期待をうち崩し、私の存在をゆさぶるのである。

ある作品の質とは、出来合いの共感をどれほど集められるか、ということとは関係がない。むしろ、観る者にとっての明確な立場をどこまで強く示せるか、に質の良しあしがあると思う。「作品No.3」は私にとってあまりにも明確に「他者」であった。それにしても一つの演劇作品を観るには労力がある。それが前衛的な作品ならなおさらだ。(小笠原幸介/本紙)



OM 2 撮影/田中英世

“楽器+身体”が作り出す衝撃 プロデューサー・小沢康夫さんインタビュー

INTERVIEW

川口隆夫×OPTRUM「ディケノヴェス」
3月5日、6日 パナソニック・センター有明スタジオ

スペイン語で「見えないと言え」という意味の舞台。1部は、一葉儀光のドラマ演奏とビデオ映像が「合体」した「ドラびでお」。2部が、ダムタイプでも活躍中のダンサー、川口隆夫とオプトラムのコラボレーション。オプトラムとは、蛍光灯の光と放電ノイズをアンプリファイする創作楽器オプトロンを伊東篤宏が操作し、進 揚一郎がドラムを叩くユニットだ。大好評だったこの舞台を、プロデューサーの小沢康夫さんとともに振り返ってみた。

*

本紙 「ドラびでお」は、映画やテレビからのサンプリング映像を大画面に写す。そのやり方は過激で、小泉純一郎、ジョージ・ブッシュ、金正日の間抜けで欲深な顔、戦争映画の爆撃シーン、「喜び組」などの映像が交互に素早くリピートされ続けるところは、ドラムの爆発音も手伝い、この3人への憎悪を観客に否応なく抱かせる。効果絶大。

小沢 確かに、一瞬、脳ミソを麻痺させるけど、マイケル・ムーアばりの煽動に興味があったわけではない。あれは、見ていると笑えるんだよ。映画の「座頭市」や女子十二楽坊の短い映像が何度もリピートされると、とても奇妙な踊りみたいで可笑しい。あの踊りみたいなのが映像的身体だとすれば、2部の川口の生の身体と対比するようになるのか、と オプトロンもそうなんだけど、笑うしかない、バカバカしい、と感じるものが現在の表現じゃないか?

本紙 ドラびでお、オプトロンともに根強い人気。どちらもマシンを使うが基本は人間が作り出すリズムですよね。どちらもインパクトは激しいだ。

小沢 ドラびでおは、ドラムセットのシンバルやバスの一つ一つがビデオのプレイ、ストップ、巻き戻しなどのスイッチになっている。それで演奏と映像制御を同時に行う。一葉さんの技術だからできる。オプトロンは伊東さんが電源をオフ・オンさせて、光と音の明滅をアンプリファイする。どちらも、原理的には簡単なローテク。マックの普及とともに広範に広がったデジタル・ミュージックへのオルタ

ナブな音楽と言えらんじゃないか。本紙 今、ポスト・デジタルという言葉もあるが、ポスト=後、という概念には疑問を感じる。先か後か、に意味があるのかな。小沢 系譜はあると思う。ルイジ・ツッロというイタリアの美術家が1913年に騒音を出す楽器イントナルモーリを制作している。これは手回しアコーディオンみたいなものだったらしい。日本なら小杉武久さんや刀根康尚とか。そういう流れがオプトロンまで繋がっている。身体性と楽器が出会う地点。プロデューサーとして追いかけていたところです。

本紙 小沢さんのプロデュースの作品は、いつもヘヴィで、オプラートにくるまったようなものはないよね。安易な快適性を原則とする表現がこれだけ溢れかえる中で、ときには人の神経を逆撫でしている。

小沢 自分のやっていることを考えてると、ちょうど10年前のオウム真理教事件(地下鉄サリン事件が'95年3月)に行き着く。オウムは僕らの世代のサブカルと引用の文化の終着点だったし、一回全部キャラにしちまえ、みたいな気分は僕にもあったし、皆あった。そもそもオウムはヨガから、つまり身体と向き合うところから出発して、破局へ突き進んでいった。

本紙 演劇やダンスも、身体に向き合うという出発点は同じだよ。

小沢 しかし、今、多くの演劇やダンスから、身体の中のゴリツとした、反社会的なものが抜け落ちてる。しかし、その落ちてるところ、隠れているところにじつは本来的なものがあるし、そこを見るべきなんだよ。

本紙 なるほど。次回は川口隆夫、ホームメイの山川冬樹、ロックのにせんねんもんだい、のドッキングですね。

小沢 川口さんはいろんなコラボレーションで、彼なりの世界を作ってきたところが面白いと思っている。乞ご期待。(井上二郎/本紙)



川口隆夫+山川冬樹+にせんねんもんだい
7月9日(土)代官山UNIT
プロデュース/小沢康夫(東京の夏音楽祭)参加作品
<http://kawaguchitakao.com>

小沢康夫 大駒船艦の制作をへて、宇治野宗輝、高嶺格、オプトロンほか話題のパフォーマンス・アートを仕掛けるプロデューサー。プリコグ主宰
precog_jp@yahoo.co.jp

ディケノヴェス 撮影/小原大貴





不況、廃部も何のその。 真摯に「ハッスル」する男達の物語。

HUSTLE MANIA 「青春青!!! (ブルースリー)」 REVIEW
◎3月18日～21日 タイニイアリス

舞台が明るくなるとリアルに建て込まれたラクビー部
部室が目に飛び込んできた。床にも壁にも代々のラグー
マンたちの涙や汗が染み付いたかのように作られたセ
ットが良い意味で臨場感を煽り立ててくれる。
負け試合の後だろうか、うなだれた男たちがそれぞれ
ベンチや上下逆さに置いたビールケースなどに無言で
腰を降ろしている。それだけでも男たちの汗臭い体臭
が匂って来る様な幕開きのシーンだ。

それぞれが見事に個性的な役者たちのリアルな会話、
動きやセリフの合わせ方など二回目の公演にしては出
来すぎていると思ったら池袋にある俳優養成所の老舗・
舞台芸術学院46期生たちが集まっての劇団だと言う。

COMING

超能力を持った引きこもり達が、 仲間を求めて集まるとき——。

遊牧管理人「ヒマワリ 一騎を飼う人'05」

◎4月21日～24日

「他人の考えていることがわかったらどんなにいいだ
ろう」きっと誰だってそう思ったことが一度はあるはずだ。
今回の遊牧管理人はそんな「他人の気持ちがわかって

それも中村座のちに金杉アソシエーツで知られた金
杉忠男氏の教え子たちだと上演後に知った。97年に急
逝した金杉氏は「説教強盗」や「上野動物園再襲撃」
などの作品で知られているが舞台芸術学院の講師とし
ても活躍した方だ。

なるほど、金杉氏の最後の教え子たちとも言うべき彼
らならではの、無理の無い演技がセリフの臭さを消して
いたのだろうと納得した。舞台は社会人ラクビーの四部
に低迷する田舎町にある羽鶴工業ラクビー部の部室。

新人の女子マネージャーに心ときめかしたり、高校ラ
クビーで活躍した新人選手が入ってきたり英国人選手
が入部したり…そんな小さな事件が彼らにとっては大

しまう人」の話。引きこもりが行方不明になる、という事
件が起こった。彼らは他人の思念を読みとってしまうと
いう超能力を持っていたのだ。だからこそ引きこもり、他
者との関わりを断ったのだ。そしてある時、彼らは仲間
を求めて集まることにした。

集まった彼らは自分たちの能力を用いて一つの精神
になろうとする。そこで作り上げるのは、自分たちが生き
ていくことができなかつた社会での、夢。彼らは、どんな

アジア各都市をネットワークで繋ぐ新宿の小劇場
TINY ALICE より最新ニュース

事であり、悪ふざけしているかのような男たちのじゃれ
合いややりとりで物語はハイテンポに展開していく。

他愛もない出来事を男の役者たちはパワフルにコミカ
ルに演じてそつが無く、女優さんたちは可愛らしく嫌味
の無い演技で安心してストーリーに入っていったが、ラ
グーマンたちが何度もパンツァー」姿になるのにはマイツ
タ。自然であり必然のシーンなのだがあんまり見たくな
いと思ったのは私だけか?

ラストシーンは会社の倒産と廃部という事件を乗り越
えて5年後の同じ部室に集まってきた面々の、その後の
様子が会話からわかってくる。試合のシーンやラストの
ラグーマンたちの力強い踊りなど、この会話劇を盛り上
げる演出のアイデアも特筆できる舞台だった。

(アリス子)

夢をみるだろうか…。

行方不明になった親友
をさがして彼らのもとにた
どり着いた女性と、夢を見
ることで新しい世界を作り
上げようとしている人々との物語を、シンプルな舞台で
テンポ良く、時に冗談のように時に切なく描く。

(劇団HP…<http://www.you-boku.com/>)



表現者達の不屈の闘いで示された、 パレスチナ「監獄化」の現実。～東京国際芸術祭2005より

東京国際芸術祭+アルカサバ・シアター
国際共同製作
「壁—占領下の物語II」
3月10日～15日 パークタワーホール

紙製ながら実物に見まごう威圧感を備える壁が、裸
舞台上に屹立している(美術:梶原)。その足元に座り込
む役者たちが「立ち上がって遊べ、若者よ 死は必ず
訪れる」と歌うワードの調べに乗って声を挙げ、互いに
絡み合う数々の物語を断続的に紡ぎ出して行く。旧市
街の壁が好き少年は兵士に捕えられ、壁の威力を思い
知らされる。演劇中毒の男は難民キャンプを渡り歩いて
芝居を打つが、その活動も壁に阻まれる。学校に行く
ことができなかつた娘は、客のドレスを着込んで教鞭を
とる空想に耽る。アラブ馬を英国に送り届けることで海
外脱出を図る男は空港で摘発され、牢獄へと投げ込ま
れる。巡礼と壁向こうの嫁との遭遇を願う男の試みは、
その都度妨げられる。ラマラにブティックを構えていた
女は壁によって店を奪われ、路上に彷徨う身ひとつに
まで剥き取られる。死んだ男を遺言通りに父祖の地に埋
葬しようにも、検問所を通過するための許可証が幾重
にも立ちばかかる。

「パレスチナという獄中」に生きる人々の声を拾い集め、
ワークショップを経て構成されたアルカサバ・シアターの
「占領下の物語II」は、パレスチナの日常生活で起きた
事実に基づいている。TIFの尽力によって実現した共
同制作を通して視覚化されたのは、全土が監獄化され
つつある地で、存在理由を剥奪された人々が直面して
いる不条理な現実である。非道な国策を行使するイスラ
エルの暴力に、武器ではなく「芸術の力によるインテリ

アード」と笑いの力によって立ち向かおうとする精神的
強さでもある。神の名において隣人の国を漁る欲望を剥
き出しにしながらも、国際政治でもメディア報道でも不
問に付されてきた感が拭えない入植政策が犯してきた
罪でもある。強固な壁で土地を内/外に分け、人間関
係を自己/他者、可視/不可視に二分しようとする病
理も挙げられる。

壁の中の「囚人」の声を呼び起こした舞台に、「看守」
の姿が現れることはない。だが壁向こうの声は、漏れ聞
こえてきた気がする。例えば、近所の人が家の周囲をフ
ェンスで囲い始め、間も無くそれが壁に代わったことを
嘆くパレスチナ人の「分厚い壁が私を窒息させる……ど
こでもやつらは先回りしている 私は引き裂かれていく」
という台詞は、分裂した精神状態にあるイスラエル人の
告白のようにも響く。ジョアの記憶に苦しむ人々が推
進する「防壁」計画の背景に、自らが人種隔離と虐殺
を担っているという罪の意識を隠蔽しようとする、矛盾を
孕んだ必然性をも見取ることもできよう。

パレスチナ和平が切望される中、イスラエル政府はい
まだ分離壁の延長を続けている。問題の複雑さに怯み
そうになりながらも、政治色を排したこの舞台が、一枚で
も多くの壁を破壊する原動力となることを願いたい。

(エグリントンみか/演劇批評)

注)「壁」…イスラエル政府がパレスチナ自治区との境界に治安上
の理由から構築している、いわゆる分離フェンス。実際には自治区に
深く入り込み、完成時(600Km)にはパレスチナ人の生存できる土地
はごくわずかになってしまう。

可能性に出会う瞬間

東京国際芸術祭2005
リージョナルシアターシリーズ
3月2日～20日

演劇はそこに住んでいる人たちのものだ。そこで暮ら
す人たちが創った舞台を、そこで生活している観客が

芸術文化を支援、発信するNPO
アートネットワーク・ジャパンより
MONTHLY LETTER Vol.16

見る。それが基本である。とはいえ、国際試合を経験し
ないサッカーチームが強くなれないように、ある段階に
達した劇団は古巣を離れて交流する必要がある。それ
にリージョナルシアター・シリーズはうってつけの機会を
提供している。

すでに評価の定まった舞台の再演ではなく、新作(あ
るいは改作)を上演してくれるのもうれしい。そこで伸び
盛りの劇団は、思う存分、自分たちの可能性を試すこと
ができるだろう。今年も意欲作が五本そろった。

まず、歴史を百年以上さかのぼってみせたのが、劇団
無限蒸気社「BARBER ORCHESTRA」(古川洋太
郎・演出)と劇団千年王国「SL」(橋口幸絵作・演出)
である。前者は、理髪店を舞台に日露戦争時と現在が
往復し、後者は蒸気機関車の誕生から引退までを、日
本社会の動向と重ねて浮きぼりにした。

父親の不在が家族にもたらす事態を取りあげたのが、
劇団人工子宮「なつこのくもゆき」(大津典子作、三好由
起演出)と大阪市立芸術創造館プロデュースの「背くら
べ」(岩崎正裕作・演出)である。不測の事態に兄妹が
いかに向き合うかという苦い現実を、幼少期の甘酸っ
ぱい記憶とともに描きだした。

トリコ・Aプロデュース『潔白少女、募集します』(山口
茜作・演出)は芝居を上演しない劇団の話である。稽古
中に劇団が崩壊していき、上演をあきらめるまでの過程
が実験的に描かれた。劇作・演出をした山口と「なつ
このくもゆき」を演出した三好は、たったひとりで演劇活動
を続ける女性で、そのような活動まで丁寧に目配りされて
いるのも、このシリーズの特色であり、楽しみでもある。

(野中広樹)



アルカサバシアター



劇団人工子宮
(撮影/加藤幸広)

「民の声 vox populi」のアレゴリーって？ 何といったの？ 誰がいったの？

INTERVIEW 脇川海里さん(イメージオペラ主宰)
die pratzte M.S.A. collection 2005 (3/16~5/5) 参加
イメージオペラ>>コントラアタック<< 「油田」
4/26(火)&27(水) @神楽坂die pratzte 問=03-5373-0536(イメージオペラ)



去年はドイツへ客演したり、名曲喫茶やplanBやBank ART馬車道ホールなどで上演活動を行ったイメージオペラ、HM/W参加以来のdie pratzteでの上演となる。

●今回はパゾリーニだーということですか？

脇川——僕、パゾリーニが好きなんです(笑)。特に「奇跡の丘」にはくらくらしました。あれであれかよ、みたいな。すごい活力ですよ。映画だけでなく、詩や批評理論も、絵さえも。とにかく、魅惑されます。

●パゾリーニって、グロテスクじゃ？

脇川——それは偏見。「サロー、ソムの市」とかでしょ？あれはね、「キワモノ趣味」の提示ではなく、ファシズムとしての現代社会の寓話。彼は消費社会を、その快楽主義の利用によって、より完全な仕方で実現されたファシズム社会だといっています。つまり、あのようなどろどろのS/M社会に、ほくらは現に生きている。でしょ？

●はあ…。えー、タイトルは「油田」？

脇川——締切に間に合わなくて、しょうがないからもうパゾリーニ全体でということ。パゾリーニの未完の遺作小説「石油」を、緩原と相談して、ずらして、「油田」。

●……。

脇川——まあでも、石油を巡って現在の戦争も起きてるわけだし、ほく自身、人生のぬかるみにはまってるし、コルタールのような日常のなか、もがくことくらいしかできない。だから、ぬかるむんです。

●ぬかるむんですか！？

脇川——いやまあ、嘘です。

●パウンドとありますが？

脇川——パゾリーニはパウンドファンでした。それでいうとパゾリーニはばりばりのコミュニストで、闘争の根拠律としての「現実」を求めてた。農民とか都市スラム。でもその後の経済成長のなかで、ボトムアップの第三世界に「輸出」されてた。で、ラディカルコミュニストPが、ファシストPを愛するのは、パウンドもまた現代文明を根底的に批判してたから。特に「利子」の批判とか。で、オルタナティブとしてのムッソリーニへ。ファシズムとコミュニズムいづれも資本主義への抵抗であったという、また大変なぬかるみですがね。パウンドの絶望、相当なぬかるみ具合です。

新しい演劇を発信する神楽坂と麻布の小劇場 DIE PRATZE より最新ニュース

●今回の上演意図を、お聞きしたいんですが。

脇川——この字数で？無理です。寓話。諷刺。暗示法闘争。ずらして、置き換え、翻訳する。目的は、自由、抑圧からの解放。詳細はhttp://d.hatena.ne.jp/kairiwにて(笑)。

●そんな。

脇川——だって。

(● = インタビュアーQ)

JOIN IN THE PICNIC 期待の公演情報

◆神楽坂die pratzte

4/18(月)

アコダンスカンパニー

「関原亜子のダンスの世界

「光降る庭」

問=03-3917-5203(S.Y.S企画)

関原) ◎前回のルネッサンスに続き、私は淡々たる日常を積み重ねた新たな世界に出会う。光降る庭は、魂を磨き続けた者達だけが集う場所。

◆麻布die pratzte

4/12(火)~4/17(日)

劇団BOOGIE★WOOGIE

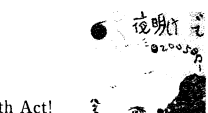
(プギ★ウギ)

【劇団BOOGIE★WOOGIE 11th Act!

「夜明けまで」 問=080-3244-5217

(劇団事務局)Wキャスト有り 詳細は上記の劇団事務所で

◎緊急手術で病院に担ぎ込まれた秋葉順一、父母、弟、恋人らの愛情と、ファンキーな院長以下執刀陣。単なる盲腸だった病状は悪化する一方 順一は生きて病院を出られるのか!?



schedule for APRIL

TINY ALICE

新宿区新宿2-13-6 光聖ビルB1 tel&fax 03-3354-7307

3/31(木)~4/5(火) 演劇実践集団デスペラース
「或る告白」 03-3994-5385 nanna-46443968.miwa@docomo.ne.jp ☆作・演出=岩瀬浩司 ☆出演=吉田智則 藤井千夏 上田さだ吉 橋本沙矢香 篠原功生 岩崎雄一 剣持直明 ◎今回はつかこうへい劇団の看板役者であった吉田智則を迎え、人間の業や生きるすべてをテーマにしています。

4/7(木)~4/10(日) 劇楽天舞隊
「三人三色 番外公演Vol.1」 03-5454-2237 rakutenbutai@dragon.email.ne.jp ☆脚色・演出=待田堂子 ☆出演=石垣まき 田中良 中澤昌弘 伊藤大輔 高橋位卓(劇団WINDS) 宇佐美恵子 高橋恭子(tea for two) 野村緑 佐藤信也(カノン工務店) ◎楽天舞隊は爆笑カノンプロ活動劇団です。今回は番外公演と銘打って、女優さんをお招きしたストレートプレイに挑戦する。

4/13(水)~4/17(日) 劇サムライNo.9
「蝶のいない街」03-5764-2457 mail@samurai9.com ☆作・演出=吉良フレディ ☆出演=笠並三 中川崇秀 堀込則倫 小椋美晴 内田彰子 瀧澤千恵 神宮陽子 平澤真行 堀口大介 ◎今回の作品は、ねじれた世界と時代劇が交差するSFコメディ。ヤンバラロマンス予測のつかない展開でうらざりまくる。

4/21(木)~4/24(日) 遊牧管理人
「ヒマワリ—鰐を飼う人05—」045-333-5291 info@you-boku.com ☆作・演出=広瀬裕 出演=遊佐邦博 塩路牧子 天野有希子 うさみともこ 大瀧静香 久富達也 ◎2002年11月に上演された第2回公演大改訂版! 全世界の研ぎ澄まされた感受性を持った住人たちが、新たに心優しい物語を織りなしていきます

4/27(水)~5/1(日) 東京サギまがい・ゲツメンチャクリクvol.1
「お化け屋敷の中〜断髪したライオン達〜」0422-49-9399 info@sagimagai.com ☆作=後藤隆征 ☆演出=山田能隆 ☆出演=山田能隆 由貴 大出雅也 小春 ベースメーカ一遠藤 RYO 寺沢俊彦 吉元鉄郎 後藤隆征 他 ◎たけし軍団のダンク主宰のこの劇団。舞台は経営不振のお化け屋敷。愛するおバカなお化け達を描いた痛快コメディです

神楽坂 die pratzte

〒162-0812 新宿区西五軒町2-12 T&F 03-3235-7990

4月のdie pratzteでおこなわれるフェスティバル

die pratzte M.S.A. collection 2005

日程: 3/16(木)~5/5(木・祝)

◎チケット予約: チケットぴあ0570-02-9988/神楽坂die pratzte=03-3235-7990 (火曜日を除く13:30~18:30) /麻布die pratzte=03-5545-1385(水曜日を除く18:00~23:00) Email: pratzte@ask.ne.jp

◎会場: 麻布die pratzte 神楽坂die pratzte M.S.A.ホール

◎料金: 前売2500円(学生2000円) /当日3000円(学生2500円) /フェスティバル通し券 6000円(学生5000円) ※1歳以下につき1回有効 die pratzteのみで予約受付

■最新演劇鑑賞会「サド・死の宴」(30周年記念公演)

4/19(火) 19:30 4/20(水) 19:30

☆作・演出・出演=宮下省死 ☆音響・照明操作=夜羽エマ

◎1975年旗揚げ以来、一貫して舞踏と演劇が融合した怪物と幻想の暗黒演劇を上演し、超アングラの王道をひたすら歩み続け、今年でついに30周年を迎える。今回の公演は、サディズムの語源ともなった、マルキ・ド・サドの殉難たる快楽に満ちた破天荒な生涯の最後の一日を、宮下省死のたくいまれなる独白と舞踏によって具現化した作品。初演時にはサドにまつわる5人の女も登場したが、今回はサド本人にのみ焦点を当てる。今後のスケジュールは一切未定の為、貴方にとって鼠派が伝説の幻の劇団とならぬよう、ぜひともお見逃しのなきよう忠告!

■イメージオペラ>>コントラアタック<< 「油田」

4/26(火) 19:30 4/27(水) 19:30

☆振付・演出=脇川海里 ☆構成・脚色・衣装=綾原江里 ☆音響・照明=曾我傑 ☆協力=歴島行成 ☆言語素材=P・P・パゾリーニ エズラ・パウンド ☆出演=野沢英代 相良ゆみ 脇川海里 他 ◎イタリアの芸術家ビエル・パオロ・パゾリーニの遺した言語、映像、絵画といった素材群は、近代性、あるいは社会の「真実性」を問う批判的思考の実験でもあった。パゾリーニの世界を起点とし、ファシズムとパルチザン、ムッソリーニ支持者であったパウンドとの関係や、サディズム/マゾヒズム、アレゴリー、パゾリーニの悲惨な死と運命などを主題系として、イメージオペラが舞台に翻訳する。

——一般の公演(フェスティバルとは関係ありません)——

3/12(土)~4/10(日) 第9回ビックリハウス風演劇フェスティバル

☆主催=青年芸術家協会 ☆後援=文化放送

tel.03-3260-1832(青年芸術家協会)

4/1(金)~4/3(日) 劇ST企画

ダンスミュージカル「ROMIO Reincarnation」

☆作=鮎月達矢 ☆演出=振付=谷口聖一 ☆振付=PONTA

鈴木愛 ☆出演=おおのゆうこ 小村作真 花田麻由子 他

4/8(金)~4/10(日) 劇鴉「ウソノコトバ」

☆作・演出=江川崇 ☆出演=熊倉裕二 前藤涼子 伊智生士

治 高田麗土 横公輝 大場秀行 わたなべみつお 他

4/13(水)~4/17(日) 劇「SHIMIN劇場」II

「書けますわー芥川賞! あなとも、私もー」 tel.048-443-

3580 ☆作=山内泰雄 ☆脚本・演出=堤吉行 ☆出演=山

下昌平 長野哲 野田純美 東条進 他 ◎お父さん、お母さん、

おばあちゃん、お姉ちゃん、お兄ちゃん、観客の皆さん!芥川賞取

れるかも知りません。チャレンジしてみたいか? でしょうか。

もしかして?……

4/18(月) アコダンスカンパニー

「関原亜子のダンスの世界「光降る庭」

tel.03-3917-5203 ☆作・演出・出演=関原亜子

4/22(金)~4/24(日) 劇「Mad Marya

【Mad Marya旗上げ公演 カイロ】 tel.090-6116-2896

☆演出=madmarya@yahoo.co.jp ☆作・演出=青木希美

☆出演=松永朋子 松尾真史 佐原誠 佐藤友美 他 ◎「胃袋から

口までのカイロ。口から心までのカイロ」ワタシのカラダを

通る一本の道があったとしたら…イロンモノが—色汰に流れて

いるのじゃようか。流れてくのは何処なのかしら。

4/29(金・祝)~5/1(日) マキコム・X

「ラフ〜おとぼけ大作戦DX」 tel.090-6543-1387

☆作・演出=平山潤一郎 ☆芸術監督=酒向芳 ☆出演=天野

裕也 竹花典子 前川真 奥田宏二 小山太郎 松尾藍 かなゆ

こ ◎ソビエトシンキング激喜劇誕生! 全国の探偵事務所に成功報酬三億円の依頼。マキコム旗揚げ大感謝祭公演にいらっ

麻布 die pratzte

〒106-0044 港区東麻布1-26-6-2F T&F03-5545-1385

die pratzte M.S.A. collection 2005

■演劇崇拜◎自動焦点「私たちは何をしているのか分からない何がかしている。」

4/5(火) 19:30 4/6(水) 15:30&19:30

☆作・演出=佐々木治己 ☆舞台美術=山下匡紀 ☆照明=三

枝淳 ☆音響=畑主 ☆出演=和氣崎 三村順久 保田寛子 宮

本享平 森川浩恵 青木佐美子 佐藤一茂 榎葉夏江 他

■笛田宇一郎演劇事務所「ハムレット/オフィーリア」

4/18(月)&4/19(火) 19:30

☆構成・演出=笛田宇一郎 ☆照明=河合直樹 ☆音響=太田

久進 ☆出演=笛田宇一郎 山田琴

■ルーム・ダンス「夜長燈と白男」

5/3(木・祝)&5/4(水・祝) 19:30

5/5(木・祝) 19:00

☆演出=田辺久弥 ☆照明=橋本剛 ☆音響=志和屋邦治

☆出演=田辺久弥 大根田真人 榎方絵夢 渡部朋子

——一般の公演(フェスティバルとは関係ありません)——

4/1(金)~4/3(日) ◎1176 エグリントン

【naivete】 問=090-1916-6463(劇団) ☆作・演出=荒

木英俊 ☆出演=福岡ゆみこ 中島美紀(ボカリン記憶倉) 泉光

典 入交恵 楠木朝子(劇団桃唄309) 他 ◎身体感覚を刺激

するエグリントンの新作。芸術家と妻の静かな生活を描く。

4/8(金)~4/10(日) 劇団ステップラダー

「アシモフのバカ」 問=090-8024-3542(劇団) ☆作=

久保孝亮子 ☆演出=大岩圭弥 ☆出演=武孝太郎 岡庭直樹

神沢知子 氏家香代子 他 ◎ヒトは神の模造品である。それじ

ゃあ、ロボットは人間のできそこないなのか? ステップラダー第

5回公演は、SFです。

4/12(火)~4/17(日) 劇団BOOGIE★WOOGIE(プギ

★ウギ)【劇団BOOGIE★WOOGIE 11th Act!「夜明けまで」

問=080-3244-5217(劇団事務局) ☆作=沢崎麻也 ☆

演出=小川信太郎 ☆出演=(Wキャスト)B=小川信太郎 佐藤

秀樹 上田郁代 はぎさわ亜矢 山口篤司 他 W=小川信太郎

佐藤秀樹 上田郁代 はぎさわ亜矢 田中美登里 他

4/22(金)~4/24(日) 劇団演劇の探偵事務所

【judas マザーグースが怖くないキ…】 問=090-1034-

9774(劇団) ☆作・演出=四万十川士郎 ☆出演=四万十川

士郎 柴純子 伊東朋子 他 ◎今回が旗揚げ劇団演劇の探偵

事務所。初公演は、男同士と女同士それぞれ劇団Mにした二

つのお話の一つのストーリーを使って、……やり過ぎた…解

釈でお届けします。

4/28(木)~5/1(日) 劇 ACT project Raccoon Dog

「月下美人」 問=03-3420-9490(劇団) ☆作・演出=

POCHI中 ☆出演=白川空司 桃乃すもも 駱駝齋オイル 真

我佐助 奥由 佐藤圭石 他 ◎20××年、日本は列島大震災に

より孤島の密集した国へと変貌。主な交通手段は船。そんな時

代に横行するのはゾロロジャー(海賊旗)を掲げた海賊達

だった。

折り返みチラシ募集

チラシをCUT INに折り返みませんか。タイニ・アリス、ディーブ
ラッで配るCUT INに、チラシを折り返み業務を始めました。一
月に5000枚、値段は格安でお引き受けします。CUT IN編集部
までご連絡ください。

03-5366-8646(井上) jiro-@za2.so-net.ne.jp